

平成30年度事業報告

特定非営利活動法人ゆう

NPO法人ゆうは、スペシャルニーズのある方々とその家族が地域でありのままに自分らしく暮らしていくための取り組みを続けています。ゆうでは、障がい理解や科学的に実証されている手法を用いて、一人ひとりへの配慮や支援を行っています。

ゆうの各事業所で行われる構造化やPECSやペアレントトレーニングなどは、もうすでに世界の各地で効果を上げている方法です。地域ではまだまだ、一人ひとりに合った、障がい特性に応じた配慮や支援をお伝えしても、ご理解いただけない場面もありますが、人として尊重される社会を目指し、各部署で伝え続けています。こういった日々の支援の成果は、成人期では、パニックや問題行動の減少、幼児期・児童期の支援では卒業後の子どもたちの様子から評価されています。特性を理解し環境を整え、その方に合った活動を提供することで、ひとりひとりを尊重し、いきいきと自分らしく過ごすことに繋がっています。

人づくりまちづくり部門では、平成23年から始めた、ペアレントトレーニングの講座などが7年目を迎えました。この活動は地域に認められ、平成30年度も行政からの要請で委託事業としてペアレントトレーニングの講座も開かれました。子育て支援課と協働し、保護者だけでなく、児童クラブのスタッフ向けなど地域の実情に合わせて、実証された方法による関わりのコツを知ってもらうことで、ありのままに自分らしく暮らしていくための、学びの場のコンテンツが地域にできたことは大きな成果です。ここまで8年の積み重ねが実を結んできています。確実にこどもも親も尊重され暮らしていけるまちづくりに繋がっています。

生活支援部では、短期入所と生活介護、ヘルパー事業所の3つが一体となって支援度の高い本人とそのご家族の生活を支える「生活支援」を行ってきました。まだまだ、連携した取り組みには課題もありますが、お互いの事業所が情報交換を深める中で、本人の理解を深められました。例えば、PECSなどのコミュニケーション支援やスケジュールの仕組みについてなど、本人が発信したり理解しやすい支援内容を一緒に考えることで、本人の特性理解を共通にすることができました。生活支援の視点で、利用者さんの暮らしや余暇、日中活動を広く見渡し支援することは、その方の想いや家族の不安も聞きながら、自分たちは何をお手伝いし寄り添っていけばいいのか？ということを改めて考えることに繋がってきています。

発達支援部では、子どもの思いにしっかりと耳を傾け、ゆうが大事にしてきている家族へのアプローチや家族との協働をそれぞれの事業所で展開しました。相談員や家族と共に本人の成長に必要な事を共に考え、本人を中心に置き、子どもの立場を伝えるスタッフの姿がどこでも見られています。ゆうには「困り解消シート」という様式があります。家族やスタッフが子どもの心の声を考え対応を考えていくシートです。こういったシートなどを活用しながら、保護者会や学習会、面談などの機会を、貴重な機

会ととらえ、保護者の悩みや不安に対して、ひとつずつ丁寧にお答えしてきています。家族からの信頼も厚く、身近な相談先として重要な役割を果たすことができました。

一人ひとりを尊重し、生き生きと暮らしていける社会となるには、まだまだ社会的な課題や事業所の課題も多くありますが、ひとつずつ前に向かって進んでいることを実感できる1年でした。学び続け、実践し続ける。そして、地域に向けて発信をする。今後も、丁寧に進めて行きたいと思います。

理事長 豊田和浩

平成31年3月31日

<ゆうが活動の柱としている考え>

理念「ありのままに、自分らしく」

スペシャルニーズのある方の想いに沿ったサポートをします。

スペシャルニーズのある方にあたたかいまちづくりを目指します。

スペシャルニーズのある方の支援を、ご家族とともに考えていきます。

スペシャルニーズに関する情報発信とネットワーク作りをします。

スタッフ行動指針

NPO 法人ゆうスタッフは以下の行動指針に沿って支援・活動を行っています。

1. 利用者・家族・スタッフ・地域の方々など、すべての人を尊敬し尊重する姿勢を持ちます。
2. 利用者のありのままを受け入れ、本人主体の支援を行います。
3. 利用者の将来を見据えた支援を行います。
4. 利用者の心の声を聞き、強みや得意を活かした安心感のあるかわり方を、本人・家族とともに考えます。
5. 自分の仕事に誇りと自信を持ち、向上心を忘れず、変化を恐れず行動します。
6. 思いやりや気配りをもって、チームで支援を行います。
7. 自分のふるまいが、あたたかい地域づくりにつながっていることを常に意識します。

平成30年度の事業

平成30年度事業は以下の体制で行った。

人づくりまちづくり部門

福祉啓発事業

- 福祉相談・個別療育相談・家庭療育指導
- 講師・アドバイザー派遣
- 講演会など 福祉フォーラム
- 各種学習会
 - まなびん、おうちでできるお膳立て、ペアレントトレーニング
- 会員利用者懇談会
- 市民活動団体・研究会の事務局受託
 - 自閉症啓発キャラバン SWING、穂の国 PECS 研究会
- 行政からの委託事業（ペアレントトレーニング、新城市保育士研修など）
- ゆうキャラバン隊
- ゆうまつり

ボランティア部門

余暇文化活動援助事業

- きょうだいの会

直接支援部門

- ゆうヘルパーステーション（短期預かり、福祉移送、行動援護、移動支援）

- ゆうサポートセンターどーや（生活介護）
- ゆうサポートセンターとことこ（児童発達支援）
- 豊川市児童発達支援施設ひまわり園（児童発達支援、保育所等訪問支援）＊指定管理
- ゆうサポートセンター（児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援）
- 相談支援 Kids ふぁ～すと（児童相談支援）
- ゆうショートステイ とれ☆きゃん（短期入所・日中一時支援）

本部事務局

- 法人事務管理

《福祉啓発事業》

福祉相談・個別療育相談・家庭療育指導

相談担当者 5名

有料の相談及び家庭療育指導（ご家族の希望で学校や園への訪問を含む）

講師派遣

- 依頼のあった福祉施設、行政機関、学校等に講師を派遣した。（計52回）
 - ・ 学校・教育関係・行政 23回（豊川子育て支援課、保育協会、新城市こども未来課、鳳来中部小学校）
 - ・ 保育園・療育関係 7回（御油第二保育園、豊川北部保育園、中部保育園、三上保育園、天王保育園、代田保育園、あおぞら園）
 - ・ 福祉関係 13回（一般社団法人ほっぷ、美浜町社会福祉協議会、若竹荘後援会、子育てネット、川崎医療福祉大学、阿倍野区地域自立支援協議会、三蔵子地区青少年健全育成推進協議会）
 - ・ 強度行動障害支援者研修関係 3回
 - ・ 児童発達支援管理責任者研修 6回

アドバイザー派遣

- 依頼のあった福祉施設、学校等にアドバイザーを派遣した。（計18回）
 - ・ 子育て広場MAH発達相談 12回
 - ・ 学校・行政関係 2回（新城市こども未来課）
 - ・ 福祉施設 4回（NPO法人楽笑）

ゆうまつり

➤ ゆうまつり2019 《来場者数 約300名》

工作コーナー、キッズスペース、感覚あそび、作品展、駄菓子屋、ビンゴ大会など

学習会・交流会

- | | | |
|---------------|-------|--------|
| ➤ まなびん | 7回 | 延べ120名 |
| ➤ おうちでできるお膳立て | 6回コース | 延べ142名 |
| ➤ ペアレントトレーニング | 8回コース | 延べ56名 |
| ➤ 会員利用者懇談会 | 3回 | 延べ16名 |

ゆうキャラバン隊

- 学校でのキャラバン活動 福祉実践教室など（睦保育園保護者会、小坂井西小学校）
- えがおフェスへの参加（発達障がい疑似体験、支援グッズ紹介）

《余暇文化活動援助事業》

きょうだいの会

障がいや発達につまずきのあるきょうだいがいる子どもたちが、普段できないいろいろな体験をしたり、きょうだいのことを普通に話せる友達作りを目的に、年3回行った。

- ・竜ヶ岩洞と浜松動物園へのお出かけ、ハロウィンパーティー、スケート

外部イベント参加

- こどもがわらうとせかいがわらう
- えがおフェス2018

直接支援部門

公的支援の直接支援部門の報告は各事業所より以下のとおり

事業所名	ゆうヘルパーステーション	管理者	柴田 憲枝
サービス提供責任者	長坂 悦子	現場責任者	長坂 悦子
<p>平成 30 年度の実施総括</p> <p>今年度は在宅の利用者さんでも社会と繋がる方法や給料を得る方法はないかと考え「くるみボタン作成など」に取り組んできた。昨年度から行っているこの活動は、ゆうまつりで販売を行い、来場者からの評判も良く売上げの一部を今年も給料としてご本人に渡すことも出来た。</p> <p>生活支援部として、とれきゃんやどーやと協力して、短期入所や支援の方向性の共有などに勤めてきた。情報交換により支援内容の見直しを行うことができた。</p> <p>現場責任者の寿退職により、今年度は業務の整理及び引継ぎなど、スタッフの業務分担の見直しを行ってきた。多くの事務作業があるヘルパーステーションでは、的確に作業が進むように時間をかけて引継ぎを行うことができた。</p> <p>行政との懇談も行い、今年度は福祉課からの制度説明の機会を設けることができた。日頃の思いや利用者の想いを行政に届けることの重要性についても再認識した。</p> <p>ヘルパー不足は依然として続いており、利用者さんからの依頼や新規の受付についてはお答えできていない。</p>			
今年度の成果	<p>日々の支援や事務作業について役割分担表を作成し直すことで各スタッフが責任をもち、効率良く行える様になってきている。引継ぎもスムーズに行えた。</p> <p>生活支援部として、どーやと一緒に支援について方向性を共有し支援に当たられた。</p> <p>スタッフ自ら意見、考えをもち上司に報・連・相が出来るようになってきた。</p> <p>在宅になっている方のとれきゃんへの体験宿泊を進めることができた。</p>		
事業所の課題	<p>個別支援計画、支援の手立ては出来ているが個別支援計画に沿ったモニタリングがしっかり出来ていない。</p> <p>人材不足。特に男性ヘルパーが少ない。また行動援護（支援度が高い）に入れる男性ヘルパーがいない。引継げる先輩ヘルパーも少なく、同行に付けられるほどの人材の余裕もない状態。</p>		

事業所名	ゆうサポートセンタードーヤ	管理者	岡部 祥子
サービス管理責任者	岡部 祥子	現場責任者	岡部 祥子
<p>平成 30 年度の実施総括</p> <p>年間計画に沿い、実施することが出来た。個別支援計画作成には、本人、家族のニーズを把握し反映させて、それに基づいて支援にあたることが出来た。又、相談シートを新たに作成し、連絡帳に挟みこむことで、ご本人・ご家族の方の困り感にも把握することができた。</p> <p>イベントでは、誕生日会、クリスマス会などの季節行事、外食、渥美半島へのお出かけを実施した。外食ではバイキングに行き、普段の昼食のお弁当では見られないようなたくさん食べる姿や、他の人に取り分ける姿など、利用者さんが楽しんで食事をされる姿をみることができた。</p> <p>構造や支援方法の見直しを随時行うことで、利用者を 1 名増やすことも出来た。</p> <p>事務業務内容の見直しとしては、利用者 1 人に 1 日利用で A4 1 枚書いていた記録を簡素化。それにより、スタッフの事務時間が削減できたこと、利用者の 1 週間 1 か月単位での様子を見直しがしやすくなった。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・生活支援部会が立ち上がり、ヘルプ、とれきゃんと同法人の成人の部門で共通して利用している人がいる中、部会で話しあうことで、色々な角度から解決方法や支援方法の手立てを聞いた。また、ドーヤの利用時間外のご本人さんの姿を知ることで、本人理解を深めることにもつながった。 ・送迎時に運転手が増員されたことで、今までにあった行き帰りの送迎中での、利用者の車外への飛び出しや、利用者間のトラブルに、乗車する支援員が事前に対応できるようになり、1 年間送迎中の大きなトラブルや事故なく行うことができた。 ・他部署からの事務仕事を頂いたことで、今まで行っていた内職作業よりも本人のスキルに合った作業を提供することが出来、尚且つ工賃 UP にも繋がった。これをきっかけに、別部署からも似たような仕事の依頼が来て「ドーヤの方たちは、こんなことが出来るんだ」というイメージ UP にもつながった。 ・交流会を 29 年度同様に行い、普段なかなか顔を合わせないご家族とスタッフも話をする事が出来た。又、利用者さんの普段の様子を動画で見ていただくことで、ご本人がどのようにドーヤで過ごされているのかをお伝えすることが出来、親御さんからは好評の声を頂いた。又、親御さん同士、悩みを言い合う姿も見られ、ご本人が大人になると、ご家族同士での交流がなかなかないという声も聞かれ、交流会のニーズの高さを感じる事が出来た。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・音に敏感な方が多い中で、大きな声、大きな音をたてる利用者さんが多く、“音”のことが課題となっている。個室のような空間を作ってはいるが、天井までは壁がな 		

	<p>く、結局音が筒抜けになってしまい、お互いに音や声を拾いあって不安定につながってしまっていることが多々みられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主に午後に外出活動を行っているが、その外での支援での OJT が人手不足のため丁寧にできずにいる。 ・記録の中に大事なアセスメント事項や支援内容が埋もれてしまっていて、以前からいるスタッフの記憶頼りになってしまっているところがあるので、シートの整理や行ったことを次に生かせるようなファイリングやシートの活用が必要である。 ・以前より、開所時間の延長や祝日営業の声がご家族よりあがっている。開所時間・日にちの検討とスタッフの確保。
--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

事業所名	ゆうサポートセンター とことこ	管理者	十都 敦子
児童発達支援管理責任者	十都 敦子	現場責任者	十都 敦子

平成 30 年度の実施総括

1 部屋における人数の多さの課題に対し、2 クラスに分け少人数制にすることで1 人のスペースを広げ、落ち着ける環境設定を行った。その環境設定をベースに、発達支援が必要な幼児に対して、個々に合わせた配慮や工夫がある環境の中で、日常生活体験を通して「できること」「わかること」を増やし、コミュニケーション力や社会性を育む取り組みを行った。個々に合った体系だった支援、遊びの充実、コミュニケーション力の育成、スタッフからの肯定的な関りの中で、認められる経験、ほめられる経験を積み、自信を育む取り組みに引き続き、力を入れた。

担任制、チーム力の課題に対しては、経験年数が浅いスタッフが多い状況ではあったが、先輩スタッフが積極的な OJT を心掛けることと、相互のやり取りの中で個人としてもチームとしても支援力を高めていくことを図った。また、一人一人の出来るためのコツを掴み、サポートの方法をご家族と共有していくこと、必要な場合は、他機関に繋げていく取り組みにも引き続き、力を入れた。ご家族の学びの場として、月 1 回の保護者会で学習会を取り入れ、学びを深める機会を作った。事業所内研修では、今、課題となっていることに対しスタッフ同士で学び合い、支援の統一を図る機会を作った。業務を見直し、限られた時間の中で行えるよう効率化、時間配分の工夫を図った。

今年度の成果

少人数制、担任制にすることで、チーム力も発揮しやすく、落ち着いた空間や個に対応した環境や成長に合わせた支援が提供しやすくなり「できること」「わかること」を増やすことができた。年 3 回の面談に加え、臨時の面談、連絡帳をきっかけに子どもの現状の情報交換を行い、目標や関わり方を共有することができた。保護者会で「お膳立て講座」、サポートブックの学びの機会等を作ること、また、保護者同士の学びの場を作ること、保護者の方のお子さんへの理解が深まるきっかけとなった。移行段階、子どもの様子で気になるところが現れた段階で、医療等の関係機関、保育所等訪問支援、相談支援事業所、他事業所と連携しながら、保護者の方も含め、よりよい支援に向けて取り組むことができた。子どものコミュニケーション力の部分も、

	PECS や伝えるためのツールを使う場面を多く設定することで、確実なやり取りができる子どもが増えた。遊びの時間の充実化を図り、取り入れられる遊びが増えた。
事業所の課題	<p>仕事の効率化、役割分担、組織だった仕事の仕方の再構築。</p> <p>担当が責任をもって利用児の支援、またその家族支援を行う体制作りをしていくための人材育成と、担任を中心とした全スタッフのチーム力の発揮と維持。</p> <p>身辺自立・コミュニケーション力・遊び等の体系だった支援内容の整理と個々に合わせた対応を行うためのスタッフのスキルアップ。</p> <p>保護者同士の交流の場作り。</p>

事業所名	豊川市児童発達支援施設 ひまわり園	管理者	高瀬 佐代子
児童発達支援管理責任者	高瀬 佐代子	現場責任者	高瀬 佐代子
<p>平成 30 年度の実施総括</p> <p>利用者のニーズに合わせた 5 つのコースを設定し、親子通園サービスを提供した。</p> <p>活動を通して子どもの得意不得意や好きなことを共有し、その子に合った関わりのコツを伝えながら、丁寧に保護者に寄り添うことで信頼関係を築いてきた。コース担任制を取り入れ、担当のスタッフがそれぞれのコースの相談や面談を受け持ち取り組んだ。保護者が記入する KIDS と、スタッフと保護者と一緒に確認をする 7 つのキーポイントをもとに個別の支援計画を作成し面談を実施した。また、学習会や茶話会を行い、保護者同士のつながりの場を作るとともに、発達や子どもに関わるコツを学ぶ機会を作り、進路や機関などの情報提供も行った。</p> <p>必要に応じて関係機関との連携をとり、情報共有を行うことができた。</p> <p>7 月より保育所等訪問支援事業を開始し、3 月までで 18 件の実績となった。</p>			
今年度の成果	<p>担当のスタッフが相談シートに丁寧に返事をお返しすることができた。必要に応じて直接お話をした。またコース担当が面談を行い、保護者と子どもの現状や課題を共有した。保護者の状態や家庭の状況によっては定期的な面談以外でも個別の対応を行った。</p> <p>通年コースでは、活動のマナー化が課題となるが、遠足や防災体験などいつもと違う活動を取り入れた。遊びを交えた消火体験をしたり、防災食を食べる機会を設け、保護者からも新鮮だったとの声があった。また、散歩が負担との声が上がりに、楽しく歩けるためのコツを一緒に考えたり、園庭と散歩を選択できるように対応した。</p>		

	<p>年3回のコンサルテーションでは子どもの発達や遊びのこと、保護者支援を学ぶ機会となり、現在の療育内容の方向性も確認することができた。</p> <p>保育所等訪問支援では、園での様子を把握し、ひまわり園での様子も園の先生と共有することができた。</p>
事業所の課題	<p>面談では十分話ができる時間を設けてきたが、人員不足があり、日常の中で保護者が気軽に聞きたいことを話せるような雰囲気作りが十分できずアンケートでも「先生が忙しそう」との声が上がった。労働環境においても、残業が多く、休憩の確保ができなかったことや持ち帰りが多くなったことが課題となった。また、保育所等訪問支援の実施が予定より実施できなかった。</p> <p>学習会においては、家庭での取り組みのフォローが十分にできなかった。</p> <p>対象児やきょうだいの体調不良などでお休みが多くなるお子さんがおり、経験をうまく積み重ねることができなかった。</p> <p>託児対象のお子さんが多く、午後の自由遊びでは大人数の中での対応が保護者の負担となった。</p> <p>全体の利用希望が多く、各コースで予定より多い受け入れとなるため、コースを分けるなどの工夫が必要となってくる。</p>

事業所名	ゆうサポートセンター いまいじゅ	管理者	大橋 美保
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	大橋 美保
<p>平成 30 年度の実施総括</p> <p>30 年度は、卒業児：7 名、30 年度の継続利用児：7 名（内週 2 日利用が 1 名）。</p> <p>親子通園として保護者にも一緒に通っていただき、子どもの心の声、行動の理由をスタッフと一緒に考えることを通じて、保護者が子どもの姿を理解する療育を行った。</p> <p>特に今年度は、保健センターから直接利用につながる、低年齢の児童や、いまいじゅを単独利用する児童が多く在籍していた。日々、子育ての不安を抱える保護者にとって、日々のやりとりを丁寧に行うことで、前向きに子育てしようという気持ちにつながられたのではないかと考えている。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ●母だけでなく、母と子を取りまく家族が療育に参加できるきっかけ作り:「ファミリーデー」の導入や、父親や祖母が来所した際に、丁寧にいまいじゅでの活動の様子や関わりのコツ等を伝える機会を作ったことで、父親が児童と 2 人で来所してくれるケースが増えた。 ●母同士のつながりを作るきっかけ作り: 自由遊びの時間の中で、共通の話題を出したり、年上のお子さんのお母さんに、実際の関わり方でうまくいったことや利用している医療機関の情 		

	<p>報などを聞かせてもらうなど、スタッフが意識的にやりとりのきっかけを作った。また、初めての来所の際には、スタッフから各親子の紹介を行った。上記のやりとりを通し、保護者同士の関わりが増えた。</p> <p>●いまーじゅスタッフの育成をする：5月より、常勤スタッフ1名に少しずつ業務を移行し、複数で回せるようにした。また、何がどこにあるのか見て分かるように掃除、整理を行った。アセスメントシートを細かく記入する設定にしたことで、突然のスタッフの欠勤があった際も、当日何をどのように支援するのかはある程度誰でも分かるような設定となった。一方で、常にギリギリのスタッフで業務を回しているため、欠勤への対応が困難であった。引き続き、いつでもだれでも対応できるシステム作りは必要である。</p> <p>●業務改善：年間計画を作成し、行った。具体的に何を行うかまでのシステム・マニュアル化はできなかった。引き続き、取り組む必要がある。</p>
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・業務の見直し、改善、効率化 ・非常時の対応について ・スタッフの確保、育成 ・活動のレパトリーや幅の開拓、時間の確保の困難さ

事業所名	ゆうサポートセンター ほっとそと	管理者	大橋 美保
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	大橋 美保
<p>平成30年度の実施総括</p> <p>地域の発達障がいのお子さんの放課後支援を行った。今年度は特に、通常級在籍児童や、学校での適応困難の児童が数名利用につながった。ほっとそとの活動の中で上手くいった工夫や関わりなどを保護者や学校へ伝える機会を作り、少しでも「自分らしく」生きる手伝いができたのではないかと考えている。</p> <p>30年度は、卒業児：6名、30年度の継続利用児：25名（内週2日利用が3名、隔週利用が1名）。下記参照。</p>			
今年度の成果	<p>●事業所の構造化、整理整頓：玩具棚、タブレット置き場、書籍置き場の視覚的構造化、整理を行った結果、子どもたちが自分から自信を持って片づけできる機会が増えた。また、備品置き場や倉庫の整理を行うことで、何がどこにあるか把握しやすく、特定のスタッフがいなくても準備できるようになった。一方で、まだ整理整頓できていない場所も多いため、今後も継続して見直す必要がある。</p> <p>●防災計画を推し進める：非常災害計画の見直し、周知、また、実際に子どもたちに向けた避難訓練を行った。一方で、非常災害時における実際のスタッフの行動など、まだイメージしづらい所もある。また、環境設定や備品等、不足がある。</p>		

	<ul style="list-style-type: none"> ●個別支援計画を実際の支援とリンクさせるシステム作り: 支援後のカンファレンス時につける記録に児童の個別支援計画を記載し、常に意識できるように工夫した。それにより、子どもの目的に応じて当日の支援方法や関わり方を事前に考えられるようになった。 ●人材育成: 新規スタッフ 2 名を受け入れた。支援中の関わり方の指導や、カンファレンス時の話し合い、日報の記載、活動案や困り解消シートの記入を通して、目的を持った支援、理由のある支援を意識づけることができた。 ●人材獲得: 人材獲得委員会より、スタッフが福祉フェアに参加。しかし就職にはつながらなかった。
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・事業所内の構造化、整理整頓 ・スタッフの育成、業務の見直し、効率化 ・保護者支援について ・研修の実施

事業所名	ゆうサポートセンター じょいん	管理者	大橋 美保
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	太田 章乃
<p>平成 30 年度の実施総括</p> <p>平成 30 年度は、昨年度に引き続き、非常勤の訪問支援員 2 名を中心に市内小学校全 26 校中 21 校、市内幼稚園全 6 園中 3 園、市内保育園全 48 園中 12 園（加配園が中心）での訪問支援を実施した。小学生の利用児が全体の 7 割近くに上り、小学校に訪問することが多くなった。教育現場でも、じょいんの意味や意義を分かって下さる先生方が増えてきており、手ごたえを感じた 1 年となった。</p>			
今年度の成果	<p>今年度重点目標（課題）から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訪問予定と事務の効率化：訪問自体は訪問先の都合もあり、訪問件数を効率的に伸ばすという形にはならなかったが、事務の流れも今年度は効率化が図れたと考えている。 ・小学校との連携：学校格差はあるが、今年度も昨年度に引き続き確実に連携が取れている小学校は増えたと実感している。 ・保護者との連絡の取り方の整備：30 年度は携帯メッセージも活用し、毎回電話をする形から必要な時に連絡いただく形の導入も図ってみた。ただ、保護者によっては意見が分かれており、今後もこういった形がよいか要検討である。 ・他施設併用利用児の情報共有：担当者会議を通して積極的に情報共有に努め、一定の成果も感じられた一方で、セルフプランなど担当者会議がない場合には課題がまだ残っている。 		

事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・すでに行われている巡回事業と似ているところもあり、巡回との関係については今後の課題と感じる。 ・訪問支援員の養成方法については、まずは各事業所の中から、利用児に関しては保育所等の訪問支援員として行けるスタッフが育てられるよう、マニュアル作りなどの整備が必要と考えている。
--------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

事業所名	相談支援 Kids ふぁ～すと	管理者	荻野 ます美
—————	—————	現場責任者	荻野 ます美

平成 30 年度の実施総括

今年度、3 名（常勤 2 名、非常勤兼務 1 名）の相談支援専門員で協力しながら支援を行ってきた。利用者アンケートによると、概ね満足してもらえている結果となった。

計画相談では、親御さんの子育て応援計画を作成して 4 年目となり、主体的に子育てに取り組める親御さんが増えたと感じる。

基本相談や福祉相談では、小学校入学後に不適応を起こして不登校気味になっている方の相談が続き、教育や医療との連携が必須な中、学校が主な活動の場である学齢期の子どもへの福祉の役割と限界（できること・できないこと）を再認識する 1 年となった。

今年度の成果	<p>（今年度の重点目標から）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お子さんの最善の利益を考え、親御さんの育児力や交渉力を奪わない様に、親御さんが主体的に子育てについて考えられるように応援することに取り組んできた結果、「見守ってくれている安心感があるから自分で頑張ってみようと思える」と言われることが増え、受給者証更新時に自ら考えてセルフプランを書いてみたいと言われる親御さんもおられたことは、今年度の大きな成果と言える。 ・難しいケースについては、子育て支援課、保健センター、ドクター等に相談しながら、一緒に考えていくことができた。
--------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・自法人のサービスのみを利用している方の計画相談について、今年度はお受けしなかったが、計画相談が必要な方だと感じても他事業所の相談員にお願いできないケースもあり、課題となっている。 ・中高生の計画相談契約者について、引継先がない状況が続いている。 ・インテークやソーシャルワークのできる相談員が育成できていない。 ・福祉相談（一般向け・無料）、療育相談（ゆう会員向け・有料）、基本相談（福祉サービス・報酬なし）計画相談（福祉サービス・報酬あり）が混在しており、利用者にはわかりにくい状況になっている。
--------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	・自立支援協議会にどのように参加していくと良いのかが見えてこない。
--	-----------------------------------

事業所名	ゆうショートステイ とれ☆きゃん	管理者	豊田 和浩
_____	_____	現場責任者	豊田 和浩

平成 30 年度の実施総括

とれ☆きゃん 3 年目となり、4 名のスタッフで短期入所・日中一時支援を行った。短期入所では、定期利用者を 7 名から 10 名に増やし受け入れと収益のアップを図った。それぞれの特性にあわせたコミュニケーション支援にも力を入れ、自分の思いを P E C S で伝えられる姿が見られている。体験宿泊なども適時行っており、大きな施設で泊まれなかった方が落ち着いて過ごすことができたなどうれしい報告をいただくことができた。一方、利用者数の増加によりスタッフの不足や受け入れに関するスタッフの負担も多くなりスタッフ同士のコミュニケーションの時間が確保できないなど課題がある。カンファレンスやケース検討を行う時間の確保は今後も課題である。

日中一時支援は、小中学生で放課後等デイサービスを利用していない方を対象とし、通常 3 名、長期休暇には 7 名の利用があった。安定的に過ごすことができるように環境等の調整を行っている。日中一時については単価が非常に低いため採算性の確保のために放課後等デイサービスへの移行を視野に進めて行きたい。

今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者を安定的に受け入れることができた。 ・利用者のコミュニケーション支援に積極的に取り組めた。
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・宿泊勤務のできる職員の確保・長期休暇含む日中一時の職員配置 ・変則的な勤務である事から、カンファレンスやミーティングの時間の確保 ・赤字経営からの脱却

法人運営のため、総会、理事会等の準備・運営を行った。法人の事務局として会員の管理、会報の発行、法人内の経理・労務管理などを行った。

- 豊川高校インターンシップ受け入れ（とことこ・どーや）NPO 法人アスクネット（新規）
- 事務業務の IT 化（タイムカードの電磁化）

現場責任者の退職に伴い、新たに常勤職員 2 名を雇用し、役割の見直しや引継ぎを行った。スタッフや会員さんが、ゆうでの活動をスムーズに気持ちよく行っていただけるように心がけ、事務作業にあたってきた。

- 業務の役割分担の見直し、引継ぎに取り組んだ。
- 業務内容の整理とマニュアル化に取り組んだ。

常勤兼務 2 名、 非常勤専従 3 名

会員動向

平成 30 年度会員の動向は以下の通り（平成 31 年 3 月 31 日現在）

近年会員数の減少がみられるゆうの活動を知っていただき、会員仲間を増やしていくことが課題である。

なお、公的な福祉サービスのみの利用者は会員数に含まれていない。

正会員 28 名

利用会員 115 名（利用会員 76 名 家族会員 32 名 団体会員 7 団体）

賛助会員 47 名